

王権と民の文学——記紀の論理と万葉人の生き様

目次

序	7
第一部 王権の論理——記紀の舞台裏	
第一章 始原	17
第一節 天地——アメノミナカヌシ	17
第二節 国土——国生み神話	23
第二章 国土平定	29
第一節 平定神——タケミカヅチ	29
第二節 移讓神——オホクニヌシ	38
第三章 国譲り	45
第一節 国譲りの意義	45
第二節 信仰的背景	53
第四章 初国知らず	63
第一節 武力制圧——神武天皇	63

第二節	信仰掌握——崇神天皇・三輪山説話……………	69
第五章	王権と臣下……………	95
第一節	レガリアを支える者——ニギハヤヒと神武東征……………	95
第二節	忠臣——ウマシマヂ……………	102
第六章	人の世の統治……………	109
第一節	為政観——タケと王……………	109
第二節	知恵と情——イハノヒメ……………	124
第七章	律令の始動……………	139
第一節	王朝交替——継体朝・勾大兄皇子歌謠……………	139
第二節	傀儡される母——斉明天皇……………	157
第三節	時空の掌握——天智天皇……………	163
第八章	支配される者の知恵……………	169
第一節	祭祀氏族——出雲国造……………	169
第二節	国造……………	182
第九章	王権の影で——怨霊……………	193
第一節	鎮魂——蘇我氏……………	193
第二節	御霊信仰……………	200
第二部	歌と民——万葉人の生き様……………	
第一章	民の心……………	215
第一節	願い——若返り……………	215
第二節	怒りと恨み——恥の表出……………	224
第二章	旅する民……………	249
第一節	陸路——手向け……………	249
第二節	水路——筏師……………	264
第三節	離別——防人……………	283
第三章	民と鎮魂……………	295
第一節	土地神鎮魂——黒人の近江荒都歌……………	295
第二節	死者鎮魂——人麻呂の吉備津采女挽歌……………	320

第四章 民と京	341
第一節 藤原京と開拓民——三山伝説	341
第二節 平城京と民——風刺の文学	358
第五章 天皇をめぐる人々	373
第一節 呪力の付与——鏡と額田王	373
第二節 資格の認定——神意と中皇命	388
結	417
初出一覧	421
あとがき	429
索引	431

序

八世紀初頭、本格的な律令政治が始動した。だが道は困難を極める。律令に対する無理解と反発、官僚の不正、貨幣の不流通（経済の混乱）、氏族や民の反抗、律令天皇の役割、皇位継承問題、……。

律令政治の始動期、王権をいかに確立させ、存続させるか、大和朝廷にとつては喫緊の課題であった。国家施設（都城・官道・大宰府・屯倉・国分寺……）の整備等、というハード面の対策のみならず、ソフト面の対策も求められた。現実に即した律令の改正や、氏族や人心を掌握することも必須であった。そのため大和朝廷は、天皇家の支配が正当性をもつにいたる歴史を人民に周知する。それが古事記・日本書紀である。記紀には王権が威厳を保つための知恵がふんだんに盛り込まれている。

対して人民は、朝廷の支配を受けながらも、力強く多様な生き様をみせる。切実な願いや恨みをもつ民、果敢に旅する民、崇る神や死者を鎮魂する民、抑圧されつつも知恵を絞る民、天皇と関わりつつ存在を主張する人々等、逞しく生きる民がいた。そのような姿は、万葉集に記されている。

王権と民、対照的な存在であるが、文学はこの二つの世界を行き来しながら展開していく。民の文学を吸収して王権が文学を作り、その文学が民に影響を与える。八世紀の文学は王権と民との間を循環しながら展開する（拙著『播磨国風土記神話の研究』及び『風土記の方法』）。

王権、民という二つの観点から文学を捉えることは、八世紀の場合、有効と考えられる。

よって本書では、記紀の分析を通して王権の論理を、万葉集の分析を通して民の生き様を考察する。そのことによつて、律令始動期という特殊な状況下で成立した八世紀の文学の在り方について考えてみたい。

以下、各章の概略を述べる。

第一部 王権の論理——記紀の舞台裏

第一章 始原

第一節 天地——アミノミナカヌシ

古事記でアミノミナカヌシを冒頭に据えるのは、始原神の世界が人間的神の秩序世界へと発展する、という史観に基づく。そして神の発展とともに始原神は身を隠す必要があったことを指摘する。

第二節 国土——国生み神話

古事記の国生み神話には、律令制に依拠した空間意識が働いており、天皇の徳が波及する様を述べている。この点が、日本書紀や風土記とは異なることを指摘する。

第二章 国土平定

第一節 平定神——タケミカヅチ

葦原中国平定の平定神が二神いることについて、従来は中臣氏（タケミカヅチ）の介入によって二神になったとされてきたが、本論では、二神で行うことに平定の本来的な意義があったことを論じる。

第二節 移讓神——オホクニヌシ

オホクニヌシは、全国の国つ神信仰を習合して一体化できる容器（霊媒体）として、大和朝廷によって作り出された神であることを論じる。

第三章 国譲り

第一節 国譲りの意義

国譲り神話は、新たに始動した律令社会の思想的根拠であるため、信憑性をもたせる必要があった。そのために文学的な知恵を駆使した、記紀最大の国家神話であったことを論じる。

第二節 信仰的背景

古事記の国譲り神話の背後に、出雲国造家に伝わる火の呪力の掌握、さらに天武天皇を火徳の天皇とする政治的意向が存することを指摘する。

第四章 初国知らず

第一節 武力制圧——神武天皇

神武天皇東征説話で神々を殺すことを記述するのは、国譲り神話（朝廷神話）を継承するものである。その点で、当該説話は、大和朝廷独自の神観念に基づいて創作された朝廷神話であることを論じる。

第二節 信仰掌握——崇神天皇・三輪山説話

三輪山説話が生成する基盤に、シャーマンが入巫儀礼時に行う儀礼（神探し）があることを指摘し、さらに古事記がそのような伝承を採録した意図（「国家安平」）について論じる。

第五章 王権と臣下

第一節 レガリアを支える者——ニギハヤヒと神武東征

ニギハヤヒはニギより先に天降り、神授の「表物」を保管している。その背後に、ニギハヤヒが「六合くくに

の中心^{もなか}」を証明する存在であること、及び物部氏が神宝管理能力を有すること、という主張が隠されていることを論じる。

第二節 忠臣——ウマシマチ

記紀とは異なり、ウマシマチを活躍させる先代旧事本紀には、天皇家を脅かしながらも、その罪を追及されまいとする物部氏の知恵が働いていることを論じる。

第六章 人の世の統治

第一節 為政観——タケと王

タケとタラシ王とがセットとなるタラシヒコ三代（景行・成務・仲哀）系譜の根底に、タケと王とが一体化して、段階的に領土を拡大して国を治めるといふ為政観があったことを指摘する。

第二節 知恵と情——イハノヒメ

仁徳天皇は人の知恵による統治を可能にした天皇であり、イハノヒメ物語は人の世の常である「情」を浮き彫りにさせるために描かれていることを指摘する。

第七章 律令の始動

第一節 王朝交替——継体朝・勾大兄皇子歌謡

勾大兄皇子歌謡（九七番歌謡）を古事記・神語等の類似歌謡と比較すると、不十分な共寝を詠み込む点に特徴がある。日本書紀がそのような歌謡を創作したのは、前王朝との関係性を述べるためであったことを論じる。

第二節 傀儡される母——齊明天皇

不気味な事件や意味不明な歌謡を採録する齊明紀の背後に、慕われる良き母像を描こうとする息子・天武の意向を読み取る。

第三節 時空の掌握——天智天皇

合理的な発想をもつ天智天皇は時空を支配する有能な天皇であったが、日本書紀では最終的には人間味あふれる天皇として描こうとしていることを指摘する。

第八章 支配される者の知恵

第一節 祭祀氏族——出雲国造

記紀神話で反逆者とされるアメノホヒ。この神を功績者に作り替えた神賀詞の背後に、出雲国造の祭祀観と知恵とが働いていることを論じる。

第二節 国造

古代国造伝承には二面性（服従と反逆）が見られることを指摘し、そこには国造の立場やプライドが大きく影響していることを論じる。

第九章 王権の影で——怨霊

第一節 鎮魂——蘇我氏

蘇我氏を悪玉とする歴史観は、日本書紀では歌謡によって語られる。そのことによって蘇我氏が崇らないように日本書紀は工夫しながら記述していることを論じる。

第二節 御霊信仰

御霊信仰の研究史を整理して問題点を抽出した上で、今後御霊信仰研究に求められるのは、個々の事例の綿密な分析であることを指摘する。

第二部 歌と民——万葉人の生き様

第一章 民の心

第一節 願い——若返り

万葉で「をつ」が発せられる背後には、身の危機を感じるほどの喪失感や不安がある。嘆きと、その状況を脱したいという一縷の望みとの葛藤の中で発せられる点に、歌ことばとしての「をつ」の意義を見いだす。

第二節 怒りと恨み——恥の表出

万葉歌人たちは〈恨み〉は詠むが、〈怒り〉は詠まない。〈恨み〉と〈怒り〉とは表裏一体の感情で、外向的な〈怒り〉ではなく、内向的な〈恨み〉を志向する点に我を凝視する韻文世界の特徴を見いだす。

第二章 旅する民

第一節 陸路——手向け

従来、通過地点の神を慰める行為とされてきた手向け儀礼を、神を欺く一回的な行為とすべきことを論じる。

第二節 水路——筏師

万葉集・巻一三・三二三二番歌には、神の許可を得て健全に労働する筏師・木樵（丹生神人集団）の様子が詠み込まれている。その叙述は土地神讃美に機能していることを論じる。

第三節 離別——防人

駿河国防人歌は共同体との一体感を志向し、上総国防人歌は孤独な〈われ〉を実感するという点に特徴が見られる。この違いは、歌い手の立場の違いによって生じていることを指摘する。

第三章 民と鎮魂

第一節 土地神鎮魂——黒人の近江荒都歌

高市黒人の近江荒都歌（万葉集・巻一・三三番歌）の背後に、都城において行われるべき土地神祭祀とその荒廃とがあることを指摘する。黒人歌は、そのことを土地神の立場から詠み込む点に特徴がある。

第二節 死者鎮魂——人麻呂の吉備津采女挽歌

吉備津采女挽歌（万葉集・巻二・二二七～二一九番歌）の背後に、第三者による死者鎮魂儀礼が存することを指摘し、そのことを踏まえて人麻呂挽歌、及び女性（死者）の挽歌の特徴を論じる。

第四章 民と京

第一節 藤原京と開拓民——三山伝説

藤原京造営以前に、この地を開拓した民が、神々の靈力を結集させる三山祭祀を行っていた。その祭祀に、既存の妻争いの話型を当てはめて文学化したのが、大和三山伝承であることを指摘する。

第二節 平城京と民——風刺の文学

世相を揶揄する平城京民は、社会批判歌を詠む。中世以降活発化する落首と類似する社会批判の万葉歌は、民が創り出した新たな文学であることを論じる。

第五章 天皇をめぐる人々

第一節 呪力の付与——鏡と額田王

額田王が天皇に寵愛されて宮廷歌壇にデビューする契機として、天武天皇が必要とした鏡の力を彼女が有していたことを論じる。

第二節 資格の認定——神意と中皇命

狩猟によって為政者の資格の有無を占う儀式が存する。そのような儀式における託宣内容を解説する役割を、儀礼の外部にいる中皇命が担っていたことを論じる。

なお引用した本文・訓読文は岩波書店『日本古典文学大系』（風土記、古事記・祝詞、日本書紀、日本霊異記）、小学館『日本古典文学全集』（旧編・萬葉集）を使用した。ただし旧字体漢字は新字体漢字に改め、また論述上必要な箇所については、私に改めた。

第一部 王権の論理——記紀の舞台裏